

学習者同士の相互添削にみる作文支援システムの教育効果

北村雅則(名古屋学院大) 加藤良徳(静岡英和学院大)
棚橋尚子(奈良教育大) 山口昌也(国立国語研究所)

概要

- 作文教育における添削の問題
- 授業内での相互添削の実践
- 分析
- 今後の課題

■ 作文教育における添削の問題

■ 教師による添削の問題点

- 些細な誤りの修正に忙殺される(添削の負担大)
- 学習者に対する一方的なフィードバックになりがち

■ 学習者同士の相互添削

- 添削の質が学習者によって左右される
- 添削することに心理的な負担が生じる
- 学習者同士では解決できないものが出る(修正の難易度高)

■ 授業内での相互添削の実践

■ 実践環境

- 対象: 大学1年生(1クラス20~30名程度×3)
- 課題内容: 道案内をするメールを作文し、相互添削をする
 - 1コマ目: システムの使い方や道案内の表現等の解説
 - 2コマ目: 作文
 - 3コマ目: 相互添削と修正

■ 相互添削

〈添削者〉

1. 修正すべきと思う箇所をマークアップ
2. 添削種目を選択, 添削の自信の度合いを, 4段階の評価値で評価
3. 適宜, コメントの挿入

〈被添削者〉

1. 添削を確認
2. 添削に対する納得の度合いを4段階で評価
3. 適宜, 修正

■ 分析

■ 添削の内訳

1.口語表現	2.漢字・表記	3.敬語	4.語彙
9	28	9	15
5.説明不足	6.冗長	7.その他	全体
36	23	11	131

■ 添削種目の適否と修正の適否

	添削種目適否	修正適否
非常に良い	79(60.3%)	79(60.3%)
やや良い	31(23.7%)	17(13.0%)
非常に悪い	21(16.0%)	35(26.7%)

- 添削種目の非常に良い・やや良いを添削成功と考えると, 成功率は84% (非常に良いは要改善箇所, やや良いは改善が望まれる箇所)
- 添削種目適否と比べ, 修正適否はやや良いと非常に悪いの値が逆転
→添削に対して修正に失敗する傾向

■指摘と修正の関係性

	添削良い	添削やや良	添削悪い
修正良い	56	9	14
修正やや良	1	12	4
修正悪い	22	10	3

の具体例

誤りが明確で、修正しやすいものがほとんど

(例)

- 口語表現(例: ×さっき→○さきほど)
- 誤字・脱字(例: ×改札口のある→○改札口のある)
- 語彙(例: ×切符転売機→○券売機)
- 説明不足(例: ×コンビニが見えます→

○ミニストップというコンビニが見えると思います)

《修正悪いの内訳》

		1.口語表現	2.漢字・表記	3.敬語	4.語彙
添削良い 修正悪い	修正無	0	5	2	2
	修正失敗	0	0	0	0
添削やや良 修正悪い	修正無	0	0	0	3
	修正失敗	0	0	0	0
添削悪い 修正悪い	修正無	0	0	0	0
	修正失敗	1	0	1	0
		5.説明不足	6.冗長	7.その他	全体
添削良い 修正悪い	修正無	5	1	1	16
	修正失敗	3	2	1	6
添削やや良 修正悪い	修正無	3	0	0	6
	修正失敗	3	1	0	4
添削悪い 修正悪い	修正無	0	0	0	0
	修正失敗	0	1	0	3

(添削良い・修正悪い)

- 修正無の方が多い
- 漢字・表記, 敬語, 語彙の修正無は, 修正のし忘れによるもの
- 修正失敗は説明不足・冗長に集中

(添削やや良・修正悪い)

- 語彙, 説明不足, 冗長にのみ出現。修正無／失敗の分布もばらばら
- 添削に絶対の効力がない分, 修正の糸口が見出しにくいのためか
- 問題を吸い上げ, クラス全体に問いかけたり, フィードバックする必要性有り

(添削悪い・修正悪い)

- 修正失敗に偏る(悪い添削に引っ張られた格好)
- 添削者・被添削者双方に知識不足が見られる→重点的に指導する項目

■相互添削後の教師による再添削

1.口語表現	2.漢字・表記	3.敬語	4.語彙
12	22	20	23
5.説明不足	6.冗長	7.その他	全体
9	41	6	133

- 学習者同士の添削数と同程度(→教師のみの添削ならば負担は倍)
- 説明不足の箇所が少なくなり, 内容面でも相互添削が有効に機能

■結論

- 学習者同士の相互添削によっても一定の効果とうむ
→形式面での些末な間違いだけでなく, 内容面でも効果が見込める
- 教師の負担が減り, 教師にしかできない添削に集中できる
- 重点的に指導すべき箇所を見出せる
(学習者同士で解決できないものや表現の改悪が見られる箇所など)

■今後の課題

- 学習者に対して, 誤りに対する「気づき」を促すような支援機能の拡充
→口語表現, 漢字・表記については機械チェックの精度向上が有効
- 教材開発・授業資料としても活用できるような分析支援機能の拡充
(例: 経年変化・クラス単位の変化のデータ集積・分析支援など)